

ソヴェトのピオニエールはなにをして遊ぶか

宮本百合子

青空文庫

夏になると、ソヴェトのピオニエールは、たいてい避暑にでかける。避暑といっても、ブルジョアの子供たちみたいに、おしやれした母親といっしょに、海岸の宿やへ行ったりするんじゃない。

ピオニエール分隊が、景色のいい田舎や海べに野営地をもっていて、ピオニエールたちは、無料で、一カ月ぐらい、楽しくそこで暮すのだ。

モスクワと云えば、ソヴェト同盟の首府で、世界の革命的プロレタリアートの都だ。このモスクワに東京で云えば本所区、浅草区と云うようにいくつか区がある。区のピオニエール分隊は、モスクワ郊外のいろんなところに、それぞれ野営地をもつて、夏の間に何百人というピオニエールたちが暮してる。

天気の良い日、汽車にのっかって、わたしは、或る野営地見学に出かけていった。小さい田舎のステーションで汽車を下りて、林の間の道をドンドン歩いて行くと、沢山の牛が小さい牧童と犬とに番されながらやって来る。

なお行くと、林から伐^きつて来た樹を、そのまんま門にして、緑の葉っぱで飾った凱旋門みたいなものが行手に見えた。

見ろ！ 鎌と槌の飾がついてる！ 赤旗がヒラヒラしてる。ピオニエール野営地の入口だ。

嬉しい心持ちで、あっちこっち見まわしながらそこをぬけると、大きい松の木の下に家があつて、裏で、赤い襟飾をつけたピオニエール少年少女が数人笑ったり喋ったりしながらジャガイモの皮むきをやっている。太ったおばさんが、前掛で手をふきながら、窓のところへ立っている。そこには涼しい風がふいた。

みんなも知っているだろう。ピオニエールは小さくたって、大人の働きをたすけることをよく知っている連中だ。大勢で野営地にくらすとき、順ぐり当番で、ピオニエールたちが食べものこしらえの手伝いも、洗濯も、掃除もみんなやるんだ。自分の室や服や、食うものやを不潔にしないと、争議するときだけ働くピオニエールというものはないんだ。

ところで、そのおばさんが窓のところからわれわれに陽気な声をかけた。

「野営地を見にきたんですか？ あんたがたは——」

「そうです」

とわたしは答えた。

「どこへ行ったらいいんでしょう」

「まっすぐその道行つて、第一番の家へ入っておきなさい」

「ありがとう」

家と松の木のかげを出たら、前にとつてもカラリとした広場があらわれた。真中に高い高い柱が立っていて頂上に大きい赤旗が翻っている。夏の光った熱い青空で、赤旗は愉快に翻っている。

朝、野營地じゅうのピオニエールが整列してラツパと敬礼でこの旗をあげる。夕方、また同じ儀式でこの赤旗をおろす。赤い労働者の旗は、ピオニエールの一日の働きのしるしなのだ。

一番目の家というのは、すぐ広場の前にある。十二三の、ピオニエールの制服をつけたオカツパのピオニエールの女の子が二人、家の入口のところに歩哨に立っている。その家の中には、この野營にやつて来ているいくつかの分隊の分隊旗、ラツパ、太鼓などが、きちんと並べて飾つてある。

そのピオニエール少女のひとりが、指導者をよんで来てくれた。まるで若い共産党青年^{コムソモール}女子だ。上は制服をきているが足はむき出しで、運動靴をはいている。元気なもんだ。

われわれは、カンカン日にてらされながら、ひろいひろい、野營地じゅうを見て歩いた。

五百人のピオニエールが走っているんだそうだが、どこにいるのか、丘や林や池のあつちこつちにちらばつて、一向めだたない。

景色はなんとも云えずいい。花の咲いてる道をダラダラのぼつてゆくと、樹にかこまれた大きい池がある。大よろこびで、ピオニエールたちは水浴びの最中だ。

植物採集をやっているらしく、しきりに茂つた草の中を、なにかさがしながら歩いているピオニエールの姿も見える。

指導者のアンナさんは、われわれとならんで草の中へねころび、満足そうにそういうピオニエールの夏休みの景色を眺めていたが、急に、

「ああ、あなた。この池をさかいにして、私どもところじゃ、大戦さがあつたんですよ」と云つた。

「大戦さ？　いつです？」

「ついこの間！」

そう云つて、アンナさんは笑つた。

「知っているでしょう。一九二九年の夏はソヴェト同盟で、世界の第一回ピオニエール大会がありました。今年一九三〇年の夏は、ドイツのハーレという市で、第二回の世界ピオ

ニエール大会がひらかれる筈だったんです。ところが、ドイツはブルジョアの天下ですからね。あなたの国日本とおなじように、ソヴェト同盟のピオニエールたちが自分の国へ出かけて来て、元気なソヴェト同盟の生活ぶりを話すのを、いやがったんです。入国許可をソヴェト同盟のピオニエールだけによこさないんです。

ソヴェトのピオニエールは一寸はガツカリしたけれど、ナニ糞！　と思ってね。ドイツへは行けなくなつたつて、ちゃんと世界ピオニエール大会は記念してやることを考えついたんです」

そして、この野営地にいる五百人のピオニエールたちは、「世界ピオニエール大会」についての集団遊戯を考えだした。

このきれいなひろい池のあっち側はブルジョア国。こっち側は、ソヴェト同盟。まず、広い野営地を、そう二つにわけた。

ブルジョア国では、国境に見張りをおいて、自分の国の中のピオニエールがソヴェト同盟へ行かないように、ソヴェトのピオニエールと連絡をとらないように番をしている。

だが、ソヴェトのピオニエールは、世界の同志となんとかして手を握ろうとするし、ブルジョア国のピオニエールがそれを望んでいることは、もちろんだ。

そこで、夜、見張りの目をかすめ、丘を越し、林をぬけて、ソヴェト側とブルジョア国のピオニエールとが忍び合い、いろんな手順を相談する。

幾日もかかって相談した。

そして、いよいよすっかり相談がまとまったとき、ソヴェト側のピオニエールは、勢盛んにブルジョア国へ侵入した。ブルジョア国の内では、きめた手順でピオニエールが待っている。

ソラ！ ソヴェト側がやって来たぞ！ 合図といっしょに立ちあがり、ソヴェトのピオニエールと力をあわせてやるぞ、やるぞ！ さんざんブルジョアをやっつけて、到頭、自分のところへもソヴェト政府をこしらえてしまった。

「遊戯は、そこでおしまいになったんです。でも、もうブルジョアとの戦いきたら、スゴイ勢だね。大人がハラハラするようでしたよ。本気なんです。とても……」

ふふーん。と自分は感心した。

どこの国の子供だって、戦さごっこはやる。けれども、これは、さすがにソヴェトのピオニエールの戦さごっこだ。ガキ大将にくつついて、ヤーツ、チャンチャン、バラバラ、とやるんじゃない。役割をきめ、組織をきめ、しかも一日ではない、幾日もかかって、世

界の革命を題にし、みんな自分たちの考えだけで遊びをやりとげるところは感心だ。

どうだ。日本の小さい同志。ひとつ、まけずに、こつちでも、ためになる、真面目な、
集団遊戯を考えようではないか。

〔一九三一年五月〕

青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集 第九卷」新日本出版社

1980（昭和55）年9月20日初版発行

1986（昭和61）年3月20日第4刷発行

底本の親本「宮本百合子全集 第六卷」河出書房

1952（昭和27）年12月発行

初出：「ショーネン・センキ」

1931（昭和6）年5月1日 復刊第1号

入力：柴田卓治

校正：米田進

2002年10月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ソヴェトのピオニエールはなにをして遊ぶか

宮本百合子

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>